

# 井上靖の挽歌観

工藤 茂

今年（昭和五十八年）は私にとって、井上靖論と縁の深い

一年であった。四月十日付で日驗から、『挽歌の系譜——井上靖の世界——』という一冊の本を刊行した。実際に完成したのは夏休みに近いころだったと思うが、この本はそれまで書きためておいた井上靖論を、一冊にまとめたものであった。この刊行が契機となつて、十一月五日に開催された大分大学国語国文学会において、井上靖の文学について語ることになった。さらに、それとほぼ同じ内容のものを、十二月に刊行された『井上靖エッセイ全集第六巻・天風浪浪』（一九八三年十二月二十日刊・学習研究社）の「月報7」に書かせてもらった。来年一月刊行予定の『別府大学紀要』に掲載されることになった「井上靖『通夜の客』の位置」も、今年の九月に

書いたものである。

ところで、これらの諸論を貫流するテーマの一つに、井上文学の特色を挽歌的発想の作品とする私の見解がある。この見解の源流は、実は、昭和四十六年十一月の国学院大学国語国文学会で報告した、「挽歌の系譜——『氷壁』をめぐって——」にあった。これは後に論文にまとめて、昭和四十七年四月刊の『國學院雑誌』（第七十三巻第四号）に掲載してもらった。もちろんこの論文も、今年出版した『挽歌の系譜』の中に収載したし、その書名もこの論文の標目をういたものであった。

このようにしてこの一年間井上靖論と付き合っているうちに、井上靖と私との間に挽歌の概念について微妙なずれのあ

ることに気づくようになった。そこで井上靖の挽歌観を明らかにして、その間隙を埋めておきたいと思う。

### \*

私が井上靖の文学の一特色に気づいたのは、当時朝日新聞に連載されていた『星と祭』と併行して『氷壁』を読み直していた昭和四十六年のことであつた。それというのも、その時点において、井上が意識的に『星と祭』を挽歌的な発想によつて書き続けていたからであろう。そのことを彼は、昭和四十九年五月五日から翌五十年一月二十六日まで、一週間に一回『毎日新聞』日曜版に連載していた、『わが一期一会』の「小説のノートから・生と死の間」に、次のように書いてゐる。

私は『星と祭』という小説で、琵琶湖で遭難死した娘と対話する父親を書いている。娘の死が確実であつても、それをどうしても信じることができず、その死を諦めきれぬ父親は絶えず娘と対話している。父は娘に捧げる挽歌を心の中で詠い続けているようなものである。この父に於ては、娘の死が遠くなり、その悲しみが薄らぐまで、娘を殯している期間は続くのである。

井上のこの明確な認識が水先案内の役目を果たして、私の眼には『星と祭』以外の彼の小説までが、挽歌的発想の作品として映じてきたのであつた。だが、彼がそのような考えを

意識的に具体化したのは、『星と祭』が最初だつたようである。それ以前彼は、『文藝春秋』（昭和四十五年一月号）に、父の葬儀の日の夜、それまで交したことになかつた話らしい話を交した記憶を書いた「風」という作品を発表している。

これはしかし、はっきりとした挽歌の意識によつて書かれたものではなかつた。というのも、井上がそのような認識を持つたのは、それ以後のことだと考えられるのだから。

昭和四十五年十月二十日の『言論人』に、彼は「挽歌について」という一文を載せている。この随筆はやがて『故里の鏡』（昭54・風書房刊。後に中公文庫として刊行）に収められ、『井上靖エッセイ全集第六巻・天風流浪』（昭58・学研）に収載されるのだけれども、彼はそこで初めて彼の挽歌観というものを披露し、「風」など一連の死者との対話に、挽歌と類似の発想のあることに気づくのである。

父の葬儀の営まれた日の夜、階下から野辺送りの酒宴の騒がしさが聞こえて来る二階の座敷で初めてその時私は父と話らしい話を交したような気がする。一組の父と子が一度は交してもいい、と言うより一度は交すべきであつたに違いない言葉を取り交したような気がする。

「この夜の父との対話は短篇小説の形で綴っているが、……」と筆者が述べているように、この体験を書いたのが「風」であつた。

ところで、筆者はこれに続けてさらに次のように書いてゐる。

親しく交つていた人の場合も、それほど深い関係にはなかつた人の場合も、訃報と共に心の中に顔を出して来る思いは同じようなもので、何かしらその人と言葉を交すことになる。こうした会話を取り交すのは訃報に接してからその時間が経たないうちのことである。相手の死を知つたその日のこともあれば、遅い場合も訃報を手にしてからせいぜい二、三日の間のことである。相手の死から受けた傷跡が、まだ心のどこかに刻まれている時のことといえる。

ここで注意しなければならないのは、死者との対話がその死後二三日間の短い時期にだけ成立するという考え方である。この考え方が井上独自の挽歌観を生むことになる。が、その前に、死者との対話に万葉集の挽歌と等質のものを見る彼の見解を引用しておこう。

私は万葉集などに収められてある挽歌というものは、やはり相手の死に直面して、それまで気付かなかつた故人との関係を思い知らされ、相手の魂に直接呼びかけるといった、そういう内容を持ったものではないかと思う。挽歌というものには単なる追悼歌とは異なつた読む者の心奥に烈しく鳴りひびいてくるものがあるが、それは思い知らされて相手と交す一方的な会話の性格を色濃く持つてゐるものではないかと思うのである。

右の文中「思い知らされて」とあるのは、筆者のことばを

借りれば、「親しかろうと、親しくなかりうと、ある程度の交渉を持った相手なら、なべて浅からぬ関係を持つた身であること」を思い知らされることであり、「少なくとも浅からぬ関係を持つべきであつたのに、どういふものか、そうならなかつた身であること」を思い知らされることである。

さて、またここで注意しておかなければならないことは、筆者が挽歌と追悼歌とはつきりと区別して、「挽歌というものには単なる追悼歌とは異なつた読む者の心奥に烈しく鳴りひびいてくるものがある……」と述べていることである。その上で井上の挽歌観を眺めてみよう。

最近、挽歌というものが殯（もがり）の期間に歌われたものであるという国文学者の論文を読んで、なるほど挽歌というものはそういうものかと思つた。言うまでもなく古代人は生と死の間に、そのいずれにも属さぬ世界を考え、そこにある期間死者の魂がとどまっているとされている。貴人の死を葬る場合、本葬の前に、仮葬の期間を設けているのはこのためで、殯というのが即ちこれである。この仮葬期間にある故人の魂に対して呼びかけたものが挽歌であるとするなら、逆に挽歌を成立させる期間の人為的設定が殯であると言つてもいいだろうと思つた。

これは以前にも書いたことであるが冒頭の「最近」とは、この随筆の発表された時期が昭和四十五年十月であることから考へて、同年七月ごろのことと思われる。というのは、こ

の月に万葉集の挽歌を特集した『解釈と鑑賞』（第35巻第8号・至文堂）が刊行され、その中に渡瀬昌忠の「人麻呂殯宮挽歌の登場―その歌の場をめぐって―」という論文が掲載されていたのだから。もっとも渡瀬はそこで、人麻呂の殯宮挽歌が殯宮の末期の、仏式の齋会の夜に、死者の死が確實となつた時に成立したのではないかと論じているけれども、井上が引用文の後半で述べているようなことには言及していない。つまりこの後半の部分は、井上が万葉集巻第二の挽歌と渡瀬の論文に触発されて懐いた彼自身の殯（もがり）の観念だつたと考えられる。なお「殯」は澤瀉久孝が『万葉集注釈巻第二』（中央公論社）に、「『大荒城乃時尔波不有跡』（三・四四一）の例により大殯をオホアラキと訓む。アラキは新城の意である。」と注しているように、「万葉集」ではアラキと訓ませている。その意味は「死して未だ葬らず、新宮に祭るをいふ（澤瀉）」ことであつた。従つてそれは、井上の言うモガリの意味に通じるものがある。

さて、井上の文章はさらに次のように続いていく。

人間というものは、生きてゐる時は、対立者としての会話しか持てない。相手が死んでしまえば、二人の関係は生者と死者であり、これまた生者と死者としての会話しか成立しない。古代人が生と死の間に、そのいずれにも属さぬ一つの世界を想定したことは、生前も死後も共に持てぬ会話の場を作つたということになるかも知れない。

い。

こういう考えの上に立つと、私が父や知人と、その死の直後交した会話は挽歌以外の何ものでもなく、今宵こそ思ひ知らるれ<sup>②</sup>の「今宵」は上代の殯の期間に相当するものということになるかも知れない。

私が井上靖の文学に顕著な挽歌的発想に気づいたのは、前にも述べたように昭和四十六年のことであつた。しかし、井上自身がそれに気づいたのは、右の引用文で知られるようにその前年の昭和四十五年のことだったのである。しかも井上と私との間には、挽歌の概念について以下のような相違があつた。井上の考える挽歌とは、これまで見てきたように、単なる追悼歌ではなく、人が死んで、しかしまだ死者とはならず、生と死との中間、つまり仏教的に言えば「中有」にある間、いやそれよりもっと短い期間に、その中間にある者との間に交されずにはいられない対話のことであつた。それに対して私の考えていた挽歌とは、伊藤博が「万葉の死に関する歌の総題に、『挽歌』ということばを呼びこんだ<sup>①</sup>」と書いている、その挽歌のことであつた。つまり、井上は「挽歌」を殯宮挽歌に限定した上で、そこに殯（もがり）についての独自の見解を導入して考えていたのに、私はそれを万葉集の挽歌全体に広げて、広義に考えていたのである。

井上の右のような挽歌観はその後変化することなく、『わが一期一会<sup>③</sup>』の中に述べられ、さらに『過ぎ去りし日日<sup>④</sup>』に

述べられていく。この井上の挽歌観を基準にすれば、当然、私の考える挽歌の系譜としての井上作品は、現在より減少していく。しかし、その必要はあるまい。なぜならば、挽歌の範囲はもつと大きく考えられており、それが現在の定説なのだから。

ところで、実際の殯宮の期間はどれくらいだったのであろうか。渡瀬昌忠によると、天武天皇の殯宮の期間は二年三月、持統天皇のそれは一年、日並皇子のそれは八ヶ月以上一年あまりではなかったか、という。従つてその期間は、井上の考えるそれよりも長かつたようである。もつとも井上も翌昭和四十六年に彼の挽歌観を小説に具体化した『星と祭』においては、その期間をずいぶんと長くとっていた。

なお、右の引用文の最後の方に、「今宵こそ思ひ知らるれ」とあるのは、鳥羽院崩御の時、高野から下山して葬送に伺候した西行が、往時の院との関係を思い出して、「今宵こそ思ひ知らるれ浅からぬ君に契のある身なりけり」と詠つたと井上がこの随筆の中に書いている、その歌の上二句の引用である。さて、彼はこの随筆を次のように締めくくる。

今日、私たちは生の世界と死の世界しか考えない。しかし、これは古代人でも同じであつたかも知れない。仮

葬期間中死者が生き返るかも知れないという考えはなかつたであろう。生き返ることのないことは承知した上で、そのいずれにも属さぬ世界を考えたということは、つま

りその期間において罪深い人間というものを救おうとしたことにほかならぬと思う。意識して挽歌の成立する期間を設けた古代人の立派さは怖いようなものである。

これはいかにも『あすなる物語』の作者らしい見解である。だが果たしてそうであらうか。確かに柿本人麻呂が殯宮挽歌を作つた時点にあつては、その死者の死が現実化していたに違いない。そのことは渡瀬も先に引用した論文に書いている。しかし殯宮の初期にあつて、遊離した靈魂がその肉体に二度は戻らないと古代人は果たして思つていたのであらうか。ここで私が思い起こすのは、釈迦空の『死者の書』である。藤原の郎女の魂呼びが、二上山の天津の皇子を覚醒させ、甦らせていくあの発想。むしろこの発想こそ古代人のそれではなかつたのか、と私は思うのである。挽歌そのものの機能は別として。

かつて井上自身、「歴史と歴史文学」という座談会(5)で、「あの書き方以外に古代は書けないのじゃないか」と『死者の書』について語っている。おそらく彼は『額田女王』を書いた認識の仕方(6)で、古代人の心理を合理化してしまつたのであらう。

## \*

このように見てくると、井上靖の挽歌観がいかに彼独自のものであつたか、ということがよく分かる。そこには「亡くなつてから話すくらいなら、生前話しておけばいいのである

が、それができないのが、人間というものの、人間と人間との関係というものの悲しいところ」(注3の引用文)であるという、彼自身の人間認識が反映していたのであった。

〔注〕

(1) 伊藤博「挽歌の世界」(『国文学・解釈と鑑賞』第35巻第8号・至文堂)の二二頁。

(2) 井上靖『わが一期一会』(昭和五〇年一〇月一五日・毎日新聞社)の一五三―一五四頁には、次のように書かれている。

何年か前のことであるが、萬葉集の挽歌を拾って読んでいる時、挽歌というものは、亡き人との対話を内容としているものではないかという考えを持った。普通の追悼歌とは異なって、直接故人に話しかけ、訴えかけるものが内容になってるように思われた。形式的な挽歌もないわけではないが、相手の死を悼むというより、悲しみや歎きや愛情をじかに相手にぶつけたものが多いように思われた。

天智天皇が亡くなった時の后たちの歌などは、愛情が烈しく、生々しくぶつけられていて眩しいくらいである。亡くなった相手は歌の作者の前に坐っているとしか思われな

い。  
昨年のことであつたと思うが、国文学雑誌で、挽歌とい

ツセーを読んで、なるほどと思ったことがあつた。殯といふのは仮葬のことであり、往古貴人が亡くなると、いったん仮葬し、そしてある期間を置いてから本葬を営んでいるが、その本葬と仮葬の間が殯の期間ということになる。どうしてこのようなことが行われていたかと言うと、人間は死んでも、ある期間は生でもなく、死でもない世界に居るといふ考えがあつたからであり、こういう考え方からすると、ある期間は仮葬しておいて、その上で本葬を営むという手段が必要になってくる。しかし、古代人でも本気で生と死の間に、生でも死でもない世界があると考えていたわけではないだろう。ただそういう期間を、つまり故人に対する悲しみがまだ生々しく続いている期間を、相手が生でも死でもない世界にいると想定し、それを殯の期間としていたのではないかとと思われる。

こう考えれば、私が父との対話を持ったのは往古のいわゆる殯の時に相当し、高安君やN君との対話を持ったのも殯の時ということになる。そして挽歌というものが、この殯の時に詠われるものとすれば、挽歌が詠われる期間といふものを、往古の人とは人為的に設定していたかも知れないのである。

(3) 井上靖『過ぎ去りし日日』(昭和五二年六月二〇日・日本経済新聞社)の一二七―一二九頁には、次のように書かれている。

亡くなってから話すくらいなら、生前話しておけばいいのであるが、それができないのが、人間というものの、人間と人間との関係というものの悲しいところなのであろう。実際に相手は死んでしまっているのであるが、相手に話しかける私の気持は、相手を死者としては取り扱っていない。相手が生者でないことははっきりしているが、と言って、死者でもないのである。

が、この生きている私と、亡くなった相手との対話はそう長くは続かない。半月経ち、一カ月経つと、相手は限りなく遠いところに行ってしまう。本当の死者になってしまうのである。

私はこの対話の成立する期間は、人間にとって、ちょっと較べるものがないほど大きい意味を持つものではないかと思う。生者と生者という対立的な立場では交すことのできない対話が、また生者と死者という一方的な立場では交すことのできない対話が、ここでは成立するのである。

こうした人間にとって大きい意味を持つ対話成立の場を、意識して人為的に設けたのが、古代の殯おくりというものではなかったか、こういう考え方は成り立たないであろうか。古人は、人間は死んでも、すぐには死者にならず、ある期間、生でもなく、死でもない世界に居ると考える。だから本葬する前に、ある期間殯おくりしておく、つまり仮葬しておくのである。

この殯の期間に詠われた歌が、「万葉集」には挽歌として収められているという国文学者のエッセーを読んだことがあったが、まことに、そのようなものであろうと思った。挽歌を、そのようなものとして読んでみると、いずれも死者追悼の歌というより、もっと直接に自分の心を相手にぶつけたものである。烈しい愛の歌になったり、悲しさの噴き上げている慟哭の歌になったりしている。ここでは対話が、歌の形をとって成立しているように見受けられる。

(4) 渡瀬昌忠「人麻呂殯宮挽歌の登場」(『国文学・解釈と鑑賞』第35巻第8号・至文堂)の三五頁。

(5) 『群像』(昭和四五年三月号・講談社)の座談会。

(本学教授)